

郭上清先生全集

第Ⅱ期

第一卷

日記 1

野上浩子全集

第Ⅱ期

第一卷

岩波書店

野上彌生子全集
第Ⅱ期 第一卷

第一回配本
(全二十五卷)

一九八六年二月六日 発行

定価三八〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑 川 亨

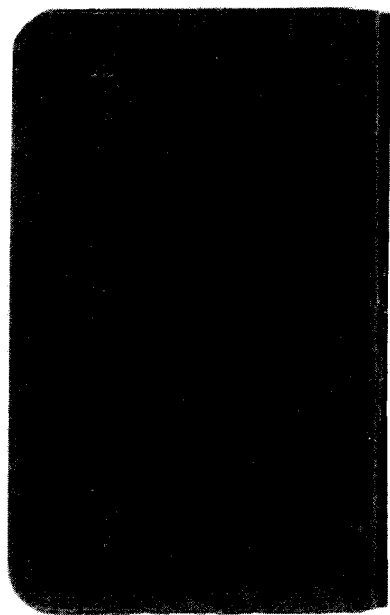
発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二^一五^五
鉄^{てつ}式 岩 波 書 店

電話 〇三^〇三^三五^五一^一四^四二^二
振替 東京六三六三〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

〔手帖〕 ・・・・・・・・・・・・・・・・一
大正十二年〔七月より〕 ・・・・・・・・四
大正十三年 ・・・・・・・・一〇三
大正十四年 ・・・・・・・・一六六
大正十五年・昭和元年 ・・・・・・・・三五三
後記 ・・・・・・・・四八三



手
帖

〔手帖表紙裏〕

書き度いとおもふものや、ふと氣のついたものの筋を漫然と頭の中に入れておくことは危険である。感じがいつとなくぼやけてしまふ、これからは考へたほどのことはこれに書きつけておくことにするつもりである。

自分は決しておもひ上つてはならない。しかし考へて見るとさう悲觀しくもよいやうな氣もする、自分の頭の中にはまだ多くの処女地を有することを感ずるから。さうだ。まだ何ものも書いてはゐない。百分の一も書いてはゐない。

マリイ・バシカアトセフを読むといつも刺戟される。あんな小娘でさへあれだけの性急と決心をもつてゐたのである。眠つたやうな生活を送くことは真に恥づべきことである。

第一、

男、三十五六、医学士、病院長、

女、(その男の妻) 二十八、近代的な婦人の完全な型、美人、

今一人の女(男の恋人) 妻と同年位ゐ、或る富豪の夫人、

場所は大阪か京都、

男はこの夫人と結婚前から愛し合つてゐたが、彼等の恋愛は結局不幸であつた。女は愛も理解もない金持の中年の男と結婚した。男は今の妻を貰つた。しかし二人の關係は絶えなかつた。女は病氣にかこつけては男の病院に來た。彼女が入院すると、男は彼の妻に屹度旅行をすゝめた。彼女は東京の実家へそれとなく遊びにやられた。聡明な妻には頓てそれが直覺された。破綻は終に來た。

富豪の妻はまた入院した。男は優しい態度で又妻に東京行きをすゝめた。妻はその機会に終に男の秘密に向つて肉薄した。男は終に告白を余儀なくされた。而してあの可愛想な女を哀んでやつてくれと哀願する。而して自分は決してお前を愛してゐないことはないのだと云つて詫びる。女はこの男のエゴイズムを憎んだ。而してもう何もかも分つた。で自分は東京に行く代りに長崎の伯母の家を訪ね度いと云ひ出す。男は賛成する。女は、自分がどうして伯母のうちへ行くか知つてゐるか、反問する、男は少し心配し出して来る。伯母の家には自分を愛してゐる従弟がゐるのだと云ふ。彼は女を愛したけれども、女は彼の愛を受け入れなかつた。彼は云つた。自分はいつまでもその愛の受け入れられる日を待つてゐようと云つた。誰がどれほど愛しても、自分がお前を愛するほど愛す

第二

る人間があらうとは思はれない。まあ世の中を見て来るがよい。而して私の愛が必要になつた時にはいつでも帰つて来い。僕はいつでも手を拵げて待つてゐると誓つた。其処へ帰つて行かうと云ふのである。男は激しい嫉妬を感じ出す。而してその妻が自分に取つて重大な、手放すことの出来ない一人であることが分つた。彼は哀願した。しかし妻はもう決心してゐた。彼は終に彼の醜いエゴイズムの中に突き落されてしまふ。彼が今まで妻に与へてゐたものを、与へられたのであつた。

結婚生活に於ける、ことに恋愛生活に於ける男性のエゴイズムを現はす。投げた石は投げ返されることを現はす。而して自分の運命をまつ直に見出す人と、まわり道をしなければ見出し得ぬ人を描く。女がその実例である。

幸福な一日、でもよし、またK氏の或る日、とてもつけてよし、

K氏は銀行家である。毎日株の話や金利の話や会社の起されるとか潰れるとかいふ話より外には何にも耳にしない人間である。それが久しぶりに中学の同窓生であつたAといふ画家に逢ふ。而して東京にゐる同じ中学の出身者で一度寄り集まつて飯でも食はうといふことになる。その時に画家の発案で元の中学の英語の先生でO先生といふのが大久保辺にゐられる、その先生をも招待しようぢ

やないかといふことになつた。画家は近所で時々先生に逢ふさうである、而して先生の超俗的で立派な人格を大に推賞する。K氏はO先生がそれほどえらい人間かどうかは分らないが、中学時代ではおとなしい、親切な教師であつたことだけはよく覚えてゐる。で別に異議なくAの提案通りO先生を招待といふことにする。会は或る洋食店の広間であつた。珍らしい旧友が皆一堂に食した。それは金権に縁故のある郷土の關係上大概銀行員とか、会社員とかいふ連中のみと云つてよかつた。Aの画家といふのは殆んど唯一の例外と云つてよかつた。

O先生が来た。粗末な綿服に紋付羽織で昔の生徒たちをなつかしさうに見廻した。彼の善良な心は今日の招待に非常に感激してゐた。彼テエブルスピーチで自分の自叙伝を語つた。而して一生を通じて、淋しく不幸であつた彼のこれまでの生涯の中で、しかしS町の中学校英語教師として暮らした数年は、最も楽しい、また意義ある日日であつたといふことを告白した。彼は其処で結婚した。子供が生れた。即ち彼の生涯の土台石が礎かれたところであつた。彼はこれ等の人々の故郷は特別の愛と親しみを思つて思ひ出されるのであつた。彼は過去の幻影をまざ／＼と目前に見るかのやうに、中学校の校舎の模様や、運動場、其処に繁つてゐる古い樹木を一ち／＼追懷した。而して自分があの校舎の中でしたさゝやかな仕事に依つて、今日までも、斯んなに諸君に愛されることは何といふ幸福だらう。自分に取つては何にも変へられない悦びだといふ意味を、素朴な、直訳見たいな言葉で述べた。彼の有つてゐる真率が人々の胸を打つた。一坐の人々は自分たちの毎日子きいたり、見たりしてゐるものとは、非常に聞つたことを聞き、非常に違つたものを見たやうな気がした。頓

第三、

女学校のヒステリックな舎監、

小使の老夫婦。

てその頃の校長や、同僚たちの噂が出た。多くは去つて実業界などに這入つてゐる人があつた。h、n、などの人名があげられた。O先生は黙つてそれ等の話に耳傾けてゐた末に、『ふむ、hさんもNさんも実業家になられたのかな。ちつとも知らないんだ、さうして見ると実業界と云ふものはよつぱどいゝものだと言えるな。』この話はO先生から出する決して皮肉ではなかつた。単純な驚きであつた。銀行家連は顔を見合せた。微笑した。それは冷笑でもなければ、嘲笑でもなかつた。彼等自身でも知らぬやうな、不明な一種の奇妙な感動から現はれた、悦びの表現であつた。K氏は殊に一層その感動を強く受けたやうな気がした。今日の会合は毎日のあらゆる種類の会合には決してえられないよいものをもつてゐたことを感じた。而してそのよいものといふことは、自分の現在の生活とは非常にかき離れたものであることを感じた。

彼はAと二人で帰り途に着きながら云つた。『あゝ、今日は本統に愉快だつた。君のおかげでいいことをしたよ。O先生にもよろしく云つてくれ。』

この結末をもつとどうか旨くつけなければならぬとおもふ。

六十でも七十でも男であることに変わりはない。

第四 協師、

尾上氏をモデルとする、お能の協師であると共に、人世の上でも協師であると云ふ意味。

型は残る、（書きものに依つても）しかし声のみは歌ふ瞬間に消え失せて行くものである。永久に失せて行くものである。蓄音機などでも不完全だとおもふ。

我々はヴェトヴェンの音楽はきゝ得る。しかし声をきくことは出来ない。若し彼の歌ふ歌の中に、彼の音符以上のものが蔵されてあつたとしても、我々はそれをきくことは出来ないのとおもふ。

美にして聡明なる職業婦人、

恋愛に対して、結婚に対しての批評、感想。

ソニヤ・コヴァレフスキイの例、

結婚はし度、と云つて誰とすればよいのか、下らない男性の多く。

あの軽蔑すべき男性の多くが、婦人の媚びと屈従を強めようとする胸のわるさ。

しかも尚ほその男性を無視しては生きられない女性の苦しさ。彼女の中には何千年、何万年間の女性が生んでゐるのである。この遺伝中の女性と手を別つことはむづかしいことである。これまでの女らしさといふものから全然新たな女性として生れることは許されぬことである。われらの細胞中にはたちばな姫がすみ、常盤がすみ、政子がすみ、大石良雄の妻がすみ、ことを否定することは出来ぬ。同時に又アンチゴネも、ジュリエットも、クレオパトラも住むことを忘れてはならぬ。

帖
平田さんからきいた話

手

或る青年画家と画家が寄留してゐた家の遠縁に当る娘とは親しい友だちであつた。女はその頃十七

位であり、男は美術学校に通つてゐた。女はよくその家に遊びに来た、二人はよく手紙のやり取りをした。ユウビンでない時には、娘が自分で学生のところへ持つて来た。その机の上においてゐた。学生はそれに返事をかいた。おもしろい、娘のよろこびさうなロマンチックな文字で、――しかし不思議とその手紙の中には恋愛の文字は一字も入れられなかつた。それは他人の話としては話された、またよんだ書物の中のはなしとしてはよく自由に使はれたが、お互ひの上ではかたくつゝしまれてゐた、つまり二人はとうと愛するとも、愛してゐるとも云はないで別れたわけであつた。何年かたつた。画家は有名になつた。彼の画は高価になつた。彼は洋行することになつた。勿論もう妻もあつた。或る時彼のところ或る女からデンワがかゝつた。今日の何時に何処そこで逢ひ度いといふデンワであつた。声にきゝおぼへがあつた。それは若い日の娘の声であつた。娘がある評判のよい実業家の妻になつてゐることは彼も知つてゐたが、勿論逢つたことも、手紙のやり取りをしたこともなかつた。二人は指定の場所で逢つて、一緒に食事をした。女のすつかり老成した、夫人ぶりを描く。男は幾らかくやしい、もどかしさを感じる、自分のものにすればされた鳥を取りにがしたやうな気で。歸りに女が男の一人の女の子におみやのおもちやを買はうといふ、男も女の男の子に土産を買つた、これでおしまひ。

猪苗代発電所では、何かの工事の際高圧線に工夫がふれることがある。するとすぐその身体が線に

すひつけられる。しかしそれがすつかり黒焦げになつて死んでしまふまでおいておけば、長い停電を止むなくされるために、下からやりでつき殺ろしてしまふといふ話、

東京で停電して、芝居の中が急にまつくらになつたり、料理屋が大あはてゞロオソクを探したりする瞬間、何千里かの彼方では斯う云ふ悲劇があるのだとおもふとぞつとする。

それから又何か反抗をするとか、おもふやうに働かぬとかする工夫をば、空いたセメントの樽に入れてあの急流に埋めてしまふといふはなしもきいた。

会津若松の豪直な、武骨一遍とおもはれてゐる人たちに、夜一夜ををどりぬくといふやうな、徹底的の享樂的精神があることはおもしろい。この氣違ひぢみた熱狂が、形をかへて維新当時の朝廷への反抗となり、凄壮な会津籠城となつたに外ならぬとおもはれる。

大正十一年二月三十日、

一昨日と昨日とにかけてまたハヂ・ムラアトをよみ返した。実に立派だ。えらいものだ。トルストイは戦争と平和やアンナ・カレニナがなくともこれ一つだけでも彼の尊さを保つに十分だとさへおもはれる。何んと云ふ美しい人間が示めされてゐることだらう。あゝ、この勇ましい正直な愛に充ちた土匪の大將を殺したものは何か。——それは現代の輕薄な文明に外ならないのだとおもふと

き私の胸は涙で一杯になる。アリカも実によく描かれてゐる。可憐な美に対して敏感な女性である。その他エルダアルでも、サドオでも、大尉でも実によい人間たちである。その他の人々でも実にかつきりした透明な性格がそれ／＼に書きわけられてゐるのにおどろく。

いつもおもふことだが、セミヨノオフはよいテマだとおもふ。このハヂ・ムラアトをよむ時ことにそれを感じる。だれかからセミヨノフのことをよく聞き度いとおもふ。

モキの組の一人の生徒の話。(モキの組で先日私のお父様といふ題で綴方をかゝせた。その時一人の生徒が次のやうなことをかいたさうだ。)

私のお父サマは私の三つの時にお亡くなりになりました。頸に出来物ができて、それを手術なすつて、それがもとでお亡くなりになつたといふことです。私は何んにもおぼへません。お父サマのお顔も写真より外には知りません。けれどもあとからおばさまから色んなはなしをききました。丁度お父サマのお亡くなりになる日は私たち兄弟は三人ともおば様のお家にあづけてら^マれてゐたさうです。而して夜おばさまと茶の間で火鉢にあたつてゐると、どうもしないのがたんと大きな音がして向ふの高窓にはまつてゐたガラスが落つこつたさうです。おや／＼と云つておば様が立つてそのガラスを拾つてもとのやうに窓にはめ込まうとした時に、そのガラスにお父さまのお顔がはつきりうつつてゐたので、おばさまはびつくらしてそのまゝガラスをはめるのをよしたさうです。お父サマは丁度その時刻に病院でお亡くなりになつたと云ふことです。おばサマはお父サマがお前たちに逢ひに來たのだと仰しやいました。私はお父サマが今でも御無事だつたらどんなによいだらうとお

もひます。

蓄音機の娘、——蓄音機の中でたえずハトポッポや、もし／＼亀さんをうたはせられてゐる小さい娘のこゑをきくと可哀想になつて来る。やせた、青白い、小娘が何度も／＼やすむまもなく引き出されて、うたはせられてゐるやうな気がする。まだとゝのはない肝だかい調子の声をはりあげて、一生懸命にうたつてゐるだけそれだけミゼラブルに感じられる。ことに雨のふる日曜朝から晩までこの娘のこゑがするとき、私は實際ヘンな腹立しい義憤的な、それでものがなしい心持になる。

私は今までにようこそしておいたとおもふものが二つある。それはギリシヤの神話に親しんだこと、謡をけいこしておいたことである。ことにうたひのけいこは実に偶然の幸福を私の生涯にもたらしたものに外ならない。私は真の意味に於ての日本といふものをこれ等のうたひの中にはじめてかんじ、はじめて知つた。ことに尾上氏のうたひの中で。保元の春寿永の秋の紅葉といふやうな言葉の中に如何に多くの感情を湛えることであらう。これ等の感情はもし私がうたひのけいこを、ことに尾上氏のうたひをきかなかつたならば決しておこしえなかつたであらうとおもふ。

同時にホーマーもダンテも自分には決して本統によくは分らないのだとおもふ。

津田左右吉氏の文学に現はれたる我国民思想の研究をよんでゐる（平民文学の時代の中）非常に自由な正しい見方ですべての方面を見てゐるのが氣持がよい。著者の頭のよさをも十分証明する。こ